

## 教員の教育能力開発

### — 鹿児島大学歯学部 の取り組み —

田口則宏・佐藤友昭・松口徹也・宮脇正一

鹿児島大学歯学部 FD 委員会

#### 【はじめに】

昨今、高等教育の現場ではFDという言葉を目にする事が多い。FDとはFaculty Developmentの略で、そのまま訳せば教員(Faculty)の開発・改革(Development)となるが、通常は「(個々の)教員の教育能力開発」を意味する。FDの言葉が公式の場に初めて登場したのは、1998年に大学審議会から出された答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について - 競争的環境の中で個性が輝く大学 - 」とされている。ここでのFDは、大学教育に関する組織的な研究・研修といった高等教育の質の保証と継続的管理を目的とする、かなり広い意味で用いられており、一口にFDといっても、その意味するものが状況や背景によって大きく変わることには注意を要する。1999年の大学設置基準の改定に伴い、第25条の2にFDの「努力義務化」が明記され、2006年の大学院設置基準改定では「組織的なFDの義務化」が断言的に記述されるなど、高等教育におけるFDのあり方は、近年大きく様変わりしている点についても注目に値する。

2008年の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」において、高等教育、特に学部教育の充実に関わる方向性が示された<sup>1)</sup>。その答申における基本的な認識は、

1. 学士レベルの能力を備える人材の育成
2. 学位水準(ベンチマーク)を明確化し、国際通用性を高める
3. 各大学の自主的な改革を通じ、学士課程教育における「3つのポリシー」の明確化を進める

というものであり、「3」に述べられている「3つのポリシー」とは、

- ・アドミッションポリシー：入学者の質の管理(入口管理)
- ・カリキュラムポリシー：提供する教育の質の管理

#### (プロセス管理)

・ディプロマポリシー：学位水準の明確化(出口管理)を示している。これらの一貫したポリシーを従来型の学部教育体制にあてはめたものを「学士課程教育」と呼び(図1)、そこで習得せねばならない汎用的能力(専門領域にとらわれず学士レベルで最低限、身につ

#### 【基本的認識】

1. 学士レベルの能力を備える人材の育成
2. 学位水準(ベンチマーク)を明確化し国際通用性を高める
3. 各大学の自主的な改革を通じ、学士課程教育における「3つの方針(ポリシー)」の明確化を進める

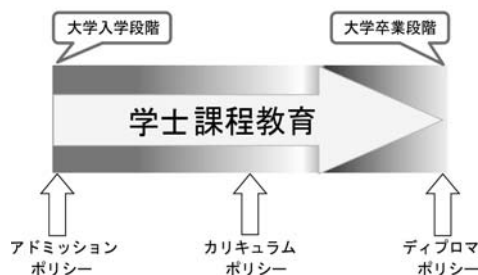


図1 学士課程教育の構築に向けて(答申) 中央教育審議会 2008年12月

1. 知識・理解(文化、社会、自然等)
2. 汎用的技能(コミュニケーションスキル、数量的スキル、問題解決能力等)
3. 態度・志向性(自己管理能力、チームワーク、倫理観、社会的責任、生涯学習力)
4. 総合的な学習経験と創造的思考力

図2 「学士力」の主な内容

けておくべき素養)を「学士力」とするなど、高等教育に対する新たな提言が行われたのは記憶に新しい(図2)。社会のグローバル化や少子高齢化、大学全入時代の到来など、高等教育を取り巻く環境の急速な変化により、わが国の学士課程教育も大きな変革が求められている。とりわけ、諸外国に対峙しうる国際的なスタンダードに基づく教育の理解または提供が十分できていない現状、また教育内容や方略、評価等の「質」の管理が徹底されていない点などは、早急に解決すべき重要課題である<sup>2)</sup>。このような取り組みを実現する中で、その最も根本的な問題は、高等教育に対する我々教員の認識を明確にすることであるとともに、教員自身の教育能力そのものにもあるとあって過言ではなく、FDの重要性はこの部分でも強調されていると考えられる。

一方で、医療系学部籍を置く教員の中で、自らが「教員」(=教育者)であることを明確に認識し、その職についているものがどの程度いるのだろうか、という疑問もわいてくる。多くの場合、大学院卒業後の有給の職として採用されているのが一般的であり、それがイコール「教育職」である、という意識はあまりないのではないだろうか<sup>3)</sup>。医療系学部でFD活動を行っていく際に、このような教員自身の「教育者としての認識」が極めて大きな影響を与えることは言うまでもなく、医療者教育の充実に関わる本質的な問題解決に至るためのプロセスは、十分な検討を要すると考えられる。

#### 【わが国の歯科医学教育におけるFD活動】

日本における歯科医学教育分野におけるFD活動の

実態は、2008年度版日本歯科医学教育学会編歯科医学教育白書<sup>4)</sup>にまとめられているので参照されたい。ここでは、その概要について簡単に触れる。本稿ではFDを、教員個人の教育能力開発活動と捉える「狭義」のFDとして考える。2008年の調査時点において、FDを年1~2回の割合で定期的にワークショップ形式(受講者参加型)で実施している歯学部、歯科大学は27校あった。またワークショップは2校が2泊3日、14校が1泊2日、その他は1日以下のコースで実施していた。2005年の調査<sup>5)</sup>では、25校がワークショップ形式で実施しており、うち13校が宿泊型とのことであるから、その実施状況は増加傾向であると考えられる。その内容と実施数について図3に示す。カリキュラムプランニングに関するテーマが最も多く19校で取り扱われており、その他、PBLチュータ・ファシリテータ養成やCBT問題作成などを取り扱うケースが多かった。歯科医学教育のカリキュラム開発方法の普及に重要な役割を果たした通称「富士研ワークショップ」(正式には「歯科医師臨床研修指導医ワークショップ」、文部科学省、厚生労働省、日本歯科医学教育学会、歯科医療研修振興財団主催)の開催が一時途絶え、その頃からカリキュラム開発をFDのテーマとして取り扱うケースが減少したようである<sup>6)</sup>。しかしながらその後、2010年度より新生「富士研ワークショップ」(正式には「歯科医学教育者のためのワークショップ」、日本歯科医学教育学会主催、文部科学省、日本歯科医師会後援)が開始され、新たなテーマとして「歯科医学教育の諸問題の解決へ向けて-教育能力の開発(Faculty development)を企画・運営できる人材の育成-」が掲げられ、ここでもFDの重要性に注目が集

	ワークショップ (1泊2日~2泊3日)	ミニワークショップ (2~7時間)
カリキュラム・プランニング	カリキュラム・プランニング(16)	カリキュラム・プランニング(6)、新人教員研修(2)、シラバス作成(1)、臨床研修指導(1)
教授法・授業法・ティーチング・評価法	PBLチュータ・ファシリテータ養成(6)、ファシリテータ養成(1)、コーチング(1)、共用試験CBTブラッシュアップ(1)、試験問題作成(1)	PBLチュータ養成(5)、PBLシナリオ作成(2)、ファシリテータ養成(1)、コーチング(1)、助言教員の資質向上(1)、CBT問題作成(5)、OSCE評価者養成(1)、客観試験問題作成(1)
学生支援・授業支援		学生支援(1)、授業支援システム(1)、ティップス(1)、学生・教職員懇談会の企画実施(1)
組織改革・その他	Evidence Based Medicine(1)	Quest Map(1)、学年ワークショップ(1)

( )内は件数

図3 ワークショップの内容とその実施数

【教授法・授業法・ティーチング・評価】

- 学生指導能力と評価(1)
- 講義資料 - 動画作成の基本 - (1)
- PBL - 新しい学習法(1)
- 歯内療法教育と臨床への顕微鏡導入(1)
- 教育・臨床のトピック(2)
- 研究テーマの探し方(1)
- 授業評価・PEER REVIEW(1)
- 共用試験 CBT 問題作成時の注意(1)

【学生支援・授業支援】

- メンタルヘルスサポート(1)
- トータルコミュニケーション支援(1)
- 患者の肖像権と個人情報保護(1)

( )内は件数

図4 各大学のFDにおける講演会，研修会で取り扱われたテーマ

まっているとともに，今後の歯科医学教育改革の方向性をも示しているとも考えられる<sup>7)</sup>。

図4には，各大学で行われているFDにおける講演会，研修会で取り扱われていたテーマを示す。大きく，教授法・授業法に関するものと，学習支援・授業支援に関するものに分類され，学生，研修歯科医に対する具体的な教育方法に関する内容に関心が寄せられている傾向であった。

【本学歯学部におけるFD活動】

本学部では，大学設置基準改定の中でFD活動が努力義務化されたこととともに，全学的な動きとともに歯学部FD委員会を立ち上げ，教員の教育能力開発に関わる様々な活動を実施してきた。平成17年度から平成23年度末までの活動をまとめると，講演会，研修会，ワークショップ，学生による授業評価，授業公開・授業参観による教員相互の評価，卒業時実施する学生アンケート調査，学外研修会，ワークショップ等への教員の派遣などが主な事業であった。

講演会で取り上げられたテーマは，「IT 歯科医療時代の歯学教育（平成19年，福岡歯科大学：湯浅賢治教授）」，「歯内療法教育と臨床への顕微鏡導入（平成20年，日本大学松戸歯学部：辻本恭久准教授）」，「岡山大学の医療系大学院高度臨床専門医養成コースの試み（平成20年，岡山大学：窪木拓男教授）」，「歯学部入試

面接スキルアップセミナー（平成21年，社会保険労務士：稲田行雄先生）」，「共用試験歯学系 CBT 作問法とその良問・悪問の例（平成22年，日本歯科大学東京短期大学：小口春久教授，明海大学：天野修教授）」，「アカデミックハラスメント研修会（平成22年，全学事業）」，「歯科医学教育の現状と将来の展望（平成23年，東京医科歯科大学：俣木志朗教授）」，「臨床能力の教育法と評価法（平成23年，広島大学病院：小川哲次教授）」であった。また，研修会で取り上げられたテーマは主として共用試験歯学系 CBT 作問に関する内容であり，「CBT 問題作成の留意点およびブラッシュアップの方法について（平成18年，日本歯科大学：小口春久教授）」，「CBT 問題作成 FD 研修会（平成19年，本学：伴清治元教授，同：梶山加綱教授，同：西原一秀講師，同：岩下洋一朗助教）」，「共用試験歯学系 CBT ブラッシュアップの問題点（平成22年，日本歯科大学東京短期大学：小口春久教授，明海大学：天野修教授）」，「共用試験歯学系 CBT 講習会（平成23年，本学：梶山加綱教授，同：中山歩助教，同：田松裕一准教授，同：岩下洋一朗助教）」などであった。また，研修会の一部には，CBT 作問委員会主催の「ブラッシュアップ作業」への参加も，研修会参加実績として認められている（平成20年～）。

ワークショップは受講者参加型の研修会であり，本学部では平成17，18，22年に各1回ずつ実施された。そのテーマは，「学生による授業評価と教育改善，教育成果の改善，授業評価実施のための方法（平成17年）」，「授業改善のための具体的方略（平成18年）」「歯科医学教育における教育能力開発（平成22年）」などであったが，いずれも数時間から1日コースで実施されており，宿泊型にまでは至っていないのが現状である。

「学生による授業評価」，「授業公開・授業参観による教員相互の評価」は，従来より全学的な取り組みの一環として実施されており，また「卒業時実施する学生アンケート調査」は学部教育修了の際に学生生活全体を振り返ってもらう機会として，毎年年度末に6年生を対象に実施されている。学外研修会，ワークショップ等への教員の派遣は，昨今急速に教育系研修会が増加していることに伴うものであり，次節にその詳細について述べることとする。

【学外における研修会への教員の派遣と参加報告】

教員を対象にした教育系研修会は，国内各所で様々な組織により企画，実施されている。本学部からもFD活動の一環としてそれらの研修会に多くの教員を

派遣し、個々の参加者ベースの能力開発とともに、その成果を組織にも広める取り組みを始めている。本稿に続く10編の報告は、平成23年1月～12月までの間に実施された学内外の各種研修会概要とともに、それらの参加者自身の考察を加えたものである。以下に、それらの研修会・ワークショップについて簡単に紹介する。

前述したとおり、わが国の歯科医学教育のカリキュラム開発方法の普及に重要な役割を果たした「富士研ワークショップ」(歯科医師臨床研修指導医ワークショップ)は休止期間を経て2010年度より再開されており、毎年1名ずつ本学部より参加者を派遣している。

学外における教育系研修会で、最も高頻度で実施されているものは社団法人医療系大学間共用試験実施評価機構の事業で行われている共用試験歯学系 OSCE の、評価者養成に資するための「外部評価者養成ワークショップ」である。これは、内容やレベルに応じて「 」と「 」に分類されており、いずれも年数回ずつ開催されている。本学部でもこれらのワークショップに毎年教員を派遣しており、臨床能力評価に対する理解を深めて頂くとともに、実際の共用試験実施に当たっては主要スタッフとしての役割を担って頂いている。

また、昨今教育の重要性が叫ばれながら十分な実施体制の確立までには至っていない「医療コミュニケーション」分野については、「医療コミュニケーションファシリテータ養成セミナー」(日本歯科医学教育学会主催)が年1度開催されており、本学から毎年1名ずつ参加者を派遣している。また、学内でも同様の企画として「医療コミュニケーションに関する講習会(慶応義塾大学：杉本なおみ教授)」(鹿児島大学桜ヶ丘三部局FD委員会合同企画)が開催され、本学部より15名の参加者があった。

新任教員対象の研修会は様々な形で実施されているが、なかでも公益財団法人大学セミナーハウスが主催する「新任教員セミナー」は、講師の充実度や研修内容からみても群を抜いたものである。本年度は幸運にも本学部より1名の教員が参加する機会を得ることができた。同様の新任教員に対する鹿児島大学の全学的な事業としては、「新任教員FD研修会」が年2回開催されており、新採用の教員に対して「教育」に対する理解を深めて頂く機会となっている。今年度は本学部よりのべ5名の教員に参加頂いた。

歯学部FD委員会の企画としては、「歯学教育者のためのワークショップ」を実施した。学部内より18名

の教員が参加し、本学部の抱える教育上の問題点等について議論を行い、情報の共有を図るとともに、今後の取り組みの方向性について検討を行った。本学医学部・歯学部附属病院は、歯科医師臨床研修制度の管理型研修施設にも指定されており、研修指導に当たる指導歯科医の養成も重要な役割である。平成22年度、23年度は厚生労働省の開催指針に則り「鹿児島大学医学部・歯学部附属病院歯科医師臨床研修指導歯科医講習会」を本学部FD委員会との共催で開催した。両年度とも32名の受講者があり、うち半数が本院の教職員であった。

教育系研修会、ワークショップは昨今、歯科領域に限らず医療系全般で広く実施されている。中でも日本医学教育学会はその裾野の広さから多くの研修会を実施しているが、本年度より始まった「医学教育専門家養成を目指したパイロットコース」(日本医学教育学会・医学教育専門家育成検討委員会主催)は多方面からの注目が集まっている。本学部より3名の教員がコース全てに参加している(コース全てに参加した歯系教員は全国でも本学からのみ)ことは、今後の本学部の教育体制の充実に大きく貢献するものと期待される。

#### 【まとめ】

以上、FD活動を取り巻く背景やわが国の歯科医学教育におけるFDの現状、本学部におけるこれまでの取り組みについて振り返った。FD活動自体は、短期的には教員自身の能力向上に資するためのものであるが、いずれは学習者に還元され、その先には医療の受け手である患者やそれを取り巻く社会に資することにつながる。自らの能力を常に向上し続けることは、医療者としてのプロフェッショナルリズムの原点であると同時に、社会に対する医療者としての説明責任でもある。今後もさらに充実したFDプログラムを構築し、医療者としての生涯学習システムを確立していく必要がある。

#### 【参考文献】

1. 中央教育審議会. 学士課程教育の構築に向けて(答申). 平成20年12月24日.
2. 森尾郁子. 高等教育のグローバル化への潮流とわが国の歯学士課程教育とのハーモニゼーション(調和)に向けて. 日本歯科医学教育学会雑誌2010: 26: 8-12.
3. 田口則宏. 臨床歯科医学教育 - 診療参加型臨床実習を推進するために -. 鹿児島大学歯学部紀要

2011 : 31 : 41-46.

4. 小川哲次. 歯科医学教育白書, 2008年版 (2006 ~ 2008年), 日本歯科医学教育学会白書作成委員会編, 教員の教育能力開発, 85-91, 日本歯科医学教育学会, 東京.
5. 八若保孝. 歯科医学教育白書, 2005年版 (2003 ~ 2005年), 日本歯科医学教育学会白書作成委員会編, 教員の教育能力向上, 85-89, 日本歯科医学教育学会, 東京.
6. 堀内三郎, 奈良信雄. 医学教育白書, 2006年版 ('02 ~ '06) 日本医学教育学会編, 医学教育における Faculty Development, 147-148, 篠原出版, 東京.
7. 葛西一貴. 第1回歯科医学教育者のためのワークショップ運営記. 日本歯科医学教育学会雑誌2011 : 27 : 33-37.